



シカゴ 企業戦士たち

第四回

今回は、JCCC会員の中でも最も長くJCCCおよびシカゴ日系コミュニティへご貢献されていらっしゃるお一人で、現在JCCC顧問 舟井 勝氏（増田・舟井・アイファート&ミツチェル法律事務所）にご執筆頂きました。

今年、JCCCは創立40周年を迎えました。確か1966年だと記憶しておりますが、Mt. ProspectにあるOld Orchard Country Clubで記念すべき第一回目のJCCC新年会が開催され、およそ100名のメンバーが集まりました。私は、先輩弁護士でもあり、また増田・舟井法律事務所のシニア・パートナーでもあった故トーマス・増田のゲストとして出席しました。増田弁護士は、JCCC創立会員の一人であり、JCCC事業にも精力的に携わっていました。当時は、丸紅アメリカ社長の田中留治朗氏が会長を、そしてトーマス社の姉川氏が専務理事をされていました。新年会は和気藹々としたこじんまりとした昼食会で、ハイライトは、新会員の自己紹介でした。

1966年以降の数期間は、競馬場を見下ろすArlington Park Hilton Hotelで新年会を開催しました。その頃には出席者数も増え、ラッフルも加えた盛り沢山の新年会となりました。中でも昼食後にみんなで紅白歌合戦を鑑賞したのを思い出します。

その数年後、JCCC執行委員会は、JCCCの受けた恩恵と収益の一部を地域社会と共有することを決定し、1万ドルを適切な団体へ寄付することにしました。そこで私は、寄付金贈呈先について助言する役割を任せられました。寄付金が贈呈された最初の団体は、シカゴ北部でChildren's Memorial Hospitalと提携するMcDonald Houseでした。McDonald Houseとは、白血病の子供たちが病院で治療を受けている間、州外在住の親達が病院で子供の世話をしながら病院近辺に滞在できる宿泊施設です。私のロースクール時代の友人であるChuck Marin氏は、Ronald McDonald Houseプログラム創始者の一人でした。

新年会で年間1万ドルの寄付金を贈呈する伝統は、その後、現在のJCCC基金という組織へと発展しました。1991年当時の事務局長を務めていらした天満氏と私はJCCC基金の運営と資金調達について、ダウンタウンにある和食レストランで昼食を食べながら何度も会議をしました。実は、この天満氏との度重なる昼食のお陰で「関西うどんランチ」（「鍋焼きうどん」と「ごはん」のセット）を知ったのです。年間1万ドルの地域団体への寄付が、今や2百万ドル以上を様々な学校や地域団体に寄付する基金へと発展したのです。JCCCは、慈善事業を形成した米国初の日本商工会議所であったと思われます。

しかしながら、JCCC基金の設立やJCCCによる慈善事業が、批判を受けたこともありました。それといえますのも、基金は「非関税障壁」という言葉がしばしばメディアに登場した「ジャパン・バッシング（Japan bashing）」の真っ只中に設立されたため、JCCCのこうした地域事業はPR戦略以外の何物でもないと批判する人々もいたのです。しかし、最終的にはシカゴ・トリビューン社もが、JCCCによる地域に密着した慈善事業活動を称賛する記事を掲載しました。（JCCC基金はおそらく、特にシカゴ近郊において、商工会議所が後援する数少ない非営利団体の一つです。）

創立40周年を迎えた今、JCCCはその偉業を誇りとすべきです。そして、これからも活気に満ち、前向きな地域団体として、繁栄していくことでしょう。私は、JCCCとの長い歴史を懐かしく思い出すと共に、JCCC会員の一人であることを誇りに思います。

舟井 勝



左側から順に
舟井 勝
ヘルムット・アイファート
増田 トーマス
ジム・ミツチェル